

- ・昼休みに、うまく一緒に遊べるように誘えなかったと思う。誘うという情報は分かっていたが、やはり初対面だとタイミングや言い方が難しいと感じた。
- ・給食後片付けの場面で、給食室に食器を返しに行くとき、情報では「ついていなくていい」とあったのに、先生から「ついていってください」と言われて、混乱した。どちらの指示に沿ったらいいのか、迷った。
- ・歯磨き前に、VOCAに自分の声で入れることが分からなかったので、どこまでVOCAを利用しているのか知りたかった。
- ・食事のときに使っているカード(かむことを促すもの)についての情報がほしかった。
- ・はみがきのとき、強い力で嫌がったので、普段の先生がしている様子が知りたかった。
- ・(画像で印象に残っているもの)「あつれ～」のカード ←おもしろかったから。
- ・(画像で印象に残っているもの)「紙コップのおもちゃ」「プーさんの人形」「トイレカード」「姿勢」

(資料12) 情報に対する感想(紙を利用した被験者)

S ₅	・短い言葉で話しかけると、コミュニケーションがとれたのでよかった。
	・(画像が欲しかったもの)タイマーの写真
	・特に注意すべき項目などは、違う色や下線などで示してもらえると、よりわかりやすい。
	・「声かけ、補助はいらないよ」という情報でかなり安心できた。
	・困ったこととして、ご飯の食べさせ方が分からなかった。「バクッ」と言うタイミングなど難しかった。
	・VOCAを使って給食の量を減らすという支援は情報通りにできたが、押し続ける岩田君にどう対応していいのか分からなかった。
	・食器について、情報には「洗って片付ける」と書いてあったが、実際には食器を洗っていなかったため、動揺した。
	・支援する側がパニックやコミュニケーション時に、どうすればうまく関われるかという情報が欲しかった。
	・子どもの情報だけではなく、支援者の関わる方法(子どもにとって安心できる存在になる)という情報が欲しかった。
	・デザートの情報について、献立によって日々違うので、デザートがある日かない日かを事前に知りたい。
	・タイマーについて、ある場所、使い方などが知りたかった。もう少し詳しく情報が欲しかった。
	・「パニックのとき」の様子よりも、対処法がもっと欲しかった。
	・「コミュニケーションのとり方」gくんからの発信は載っていたが、こちらからの発信のしかたが欲しかった。
	・その日の体調や機嫌などを事前に知っておきたかった。
・給食後片付けについて(食器洗いについて)の情報が、実際と違って、先生に聞いたとき混乱した。	
・食事場面で、情報と違うタイマーを使っていたので、混乱した。	
・給食については、その日のメニューが係りの仕事などに影響してくるので、メニューなどのその日その日で変わることについての情報が欲しかった。	
・情報と、実際が違うことがあったので、そこが改善されるといいと思う。	
S ₆	・(情報の量について) ちょうどよいと思う。必要なことは書いてあると思う。
	・今回は、最初から必要と思う項目しか見なかった。前回の経験から、「勉強の時間」や「掃除」は見なくても大丈夫だと思ったので。
	・おぼんを返しに行くとき、手をつないでくることがないではダメと書かれてあって、でも拒否できなかったとき。
	・歯磨きのとき、コップの水を飲んだことに気付かなかった。
	・情報を見て「何もなくてよい」と全体に書いてあったので、話すきっかけをなくしてしまった。
	・勝手に話しかけたり、無理にやらせたりなどしないとも書いてあって、何もできなくなってしまった。
	・支援者の言うことに対して反応してくれないので困った。 例)給食のとき「つまんで食べるように」という支援に対して、i君は最後までつまんで食べてくれなかったこと。
	・情報どおりにしたが、うまくできなかった。 例)おぼん返しに行くとき、「10mくらい離れてついていく」という支援に対して、松尾君が支援者が歩かないと歩いてくれなくなった。
	・靴のかかとのことも気づかなかった。→紙の情報で注意しなければ偉い事象に気づかなかった。
	・紙に書いていた情報でどうしたらいいのか分からなかった。 例)歯磨き中、水をのませないように」と書いていたが、結局飲んでしまった。
	・食事をすすめるとき、先生だと食べて支援者だと食べなかった。同じ「どうぞ」という支援方法でも、ちょっとした工夫が必要だと感じた。
	・(情報の内容について)前回、吉川さんだったので「声かけしすぎてはいけない」という情報が大切だったので、そのようなことはないのかと、不安を感じた。
	・情報は、事前に渡されたときに覚えていたので、その後は読む必要はなかった。
	・「近からず遠からず」の表現は、あいまいなだけで、支援者の顔は見えてもいいが近くには寄らないという距離感が想像できてよかった。
・「補助はいらない」「声かけして」という情報があって安心感が増した。どの場面で支援が不要で、必要なのが明確に分かったので、支援しやすかった。	
・遊び方についての情報がもっとほしかった。	
・「だめという否定語を言わないように」という情報は、印象に残っている。禁止事項なので、守らないといけないという意識があったから。	
・情報量は多かったため、とても参考になった。もう少し詳しくあればいいところもあった。 例)「ごま塩」をどこにどう振っていいのか分からなくて困った。	

S ₇	<ul style="list-style-type: none"> 「ひもを振るのが大好きです」とあっても、それはしてもいい遊びなのかいけない遊びなのか分からない。 ↑【好きな遊び】の項目にあるが…と質問すると、それでも分からない。 ・トイレで、情報には声かけで行けるとあったが、いつ声かけをすればよいか分からず、困った。 ・「フォークやスプーンで食べます」と書いていても、どちらでどんなときに食べればよいか分からない。 ・「促す」方法がわからなかった ・昼休みに、外から帰ってきて、「トイレカード」を取るという情報は見ていたが、時間がたっていたので忘れていた。 ・「心臓に欠陥があるので…」という情報について、どの程度の運動は出来てどの程度は出来ないのか、具体的に分からず、困った。 ・給食について、普段指導していることが分からなかったので、注意すべきこととしなくてよいことを明確にした情報が欲しかった。 ・昼休み、一緒に遊ぶにはどうしたらよいかの情報がほしかった。 ・全般について、普段大本くんがどのように過ごしているのか、大人とどのように関わっているのかについての情報が、もっと欲しかった。支援者が「どう支援したらよいか」が少なかったのでは？ ・ふだんの様子についてよく知っている人でないと、この情報は作れないと思う。でも、初対面の利用者にとって、分かりにくい表現になっていたり、(作成者の)「書かなくてもわかるだろう」という情報が、実際は必要だったりするのではないかと思う。 ・フォークをどうやって握っているか分からない。←画像が欲しかった。 ・普段やっていること(役割や活動のスケジュールなど)が情報に欲しい ・VOCAの情報が分かりにくい。画像も見えにくい。 ・具体的な声かけの方法が情報として欲しい。 ・欲しい情報がない。 ・決まりごと(例えば学校のスケジュールなど)があるのなら、それを書いて欲しい。 ・どういう声かけが必要なのか、書いて欲しい。 ・昼休みの場面で、情報の内容の意味が分からずに、混乱した。(10分は外で遊んでいて、10分たったら中に入ってきて、トイレへ行った後、教室であそぶという情報) ・(画像がほしかったもの)物の場所や、持ち物の写真 ←どこから持ってきて、どこに直すのか分からないと不安だから。 ・情報があってもそれをどう使うかが分からないし、知りたいことが書いていなかった。 ・文章だけではどういう意味なのか分からなかったが、先生に理由を聞いてやっと理解できた。 例) パソコンが好きで運動不足だからなるべく外で遊ばせたい。 	
	<ul style="list-style-type: none"> ・「給食をかきこんで食べる」というのは、もっと一気にいくかと思っていたが、特にそうでもなかった。 ・場面ごとになっているので、どこをみたら欲しい情報が載っているか、見つけやすい。 ・「もぐもぐ」と言って、かきこんで食べないようにするなどの情報は役にたった。 ・「箸藏君を使う」という情報があることで、箸を使って食べるという情報が伝わったので安心した。 ・ほとんど給食も一人で食べていたので、安心だった。 ・「カードをみながら…」という情報は、カードを使うことは分かっていたが、hさんが持ってくるのを忘れていて、どんなカードか分からずどうしたらいいか困ってしまった。 ・カードを使うとあるが、hさん自身が持っているものなのか、教室内に置いてあるのかわからなかった。 ・全部覚えたつもりでいたが、「背中をさすって姿勢を正す」「歯ブラシを持って最初は支援する」など支援方法を忘れていたのもあった。 ・「声かけ・補助はいらない」の情報に対して、出来るだけ言わないようにしようと思っていたが、動作がゆっくり過ぎて時間がかかっているときに、言うべきか言わないべきか判断に困った。 ・休み時間に、一緒に遊ぶにはどうやって遊ばよいか情報がなかったので、困った。 ・「先生ごっこ」が好きなのは、情報から知っていたが、いつもどうやって「先生ごっこ」をしているか分からなかったもので、誘えずに困った。 	
	S ₈	<ul style="list-style-type: none"> ・はみがきのとき「見本を見せる」という支援は情報から分かっていたが、どのように見本を見せたらよいか分からなかったもので、出来なかった。 ・「声かけ・補助はいりません」と情報に書かれている場面では、声かけしてはいけないような気持ちだったので、「声かけが必要かな」と思っても、プレーキがかかっていた。(給食片付け場面) ・書かれている情報と、先生に言われる情報が違うとき、少し混乱してしまう。どちらの指示に従えばいいのかわからないから。 ・遊びの場面の「誘われると…」の誘い方がよく分からなかった。

- | |
|--|
| ・「オーバーにほめる」といっても、どれくらいほめればいいのか分からなかった。 |
| ・声かけしなくていいとのことだったので、支援者から遊びを誘うのはしてもいいものなのか分からなかった。 |
| ・当番(給食)や役割の情報があれば嬉しい。役割などが特にない場合は、なしという情報もほしい。 |
| ・『プレイヤー』『プレイルーム』『PDA』とは、どんな意味?どんなもの? |
| ・休み時間の一緒に遊ぶ遊び方の情報をもっと欲しかった。 |
| ・(画像が欲しかった情報は)「パネルシアター」の意味が分からなかったので、パネルシアターの画像 |
| ・頸椎がズレるとはどういうことか分からなかった。 |
| ・「カセット並び」の意味がよく分からなかった。 |
| ・好きなものはよく分かるが、それを実際にどうすればいいのか分からない。場面が想像できない。 |

(資料13) その他の感想(e-ppシステムを利用した被験者)

S ₁	<ul style="list-style-type: none"> ・休み時間に元気に遊ぶ事ができ、笑顔がたくさん見られたので、安心できた。 ・VOCAの「ごちそうさまでした」を途中で押していて、使い切れていないのかと思って、どうしたらよいか分からず混乱した。 ・給食片付け中に、機嫌が悪くなり、どうしてよいか分からなかった。 ・ごま塩やコーンフレークばかり欲しがるのがあげてよいか分からないかった。 ・給食(おかず)をほとんど食べないことが不安だった。 ・担任の先生に聞くことで、対応できた。 ・短時間であるが、楽しかった。 ・短時間であるが、勉強になった。 ・事前に目を通していたので、困り果てることはなかった。 ・有意義な時間が過ごせた。 ・初対面だったので、すこし不安の気持ちを持って給食の時間を迎えた。 ・担任の先生の手を借りる事が多かったので、不安の気持ちが増した。 ・初めてのことでばかりで不安だった。 ・自分なりにe-ppの情報を参考に介護した。 ・困ったことは、先生に聞きすぎてもいいのか、分からなかった。 ・先生に(手首をつかむ行為を)指摘されて、適切な対応ができていなかったと思い、失敗したと感じた。 ・介護をしながらその状況に応じて知りたいこと(細かいこと)が出てきて、その度に何人もの先生に聞かなければならなかった。 ・声かけなどをし過ぎて、もしかしたら子ども自身のペースを崩してしまったのではないかと、という心配があった。 ・休み時間、パソコンで遊んでいるときは、何をしたらよいか分からなかった。 (4回終了して、今後e-PPシステムがあれば、利用するか?) どちらでもよい。 事前に(サポートに来る前に)見れるのであれば、ぜひこのシステムを使いたいと思うが、当日見るのであれば、紙でもよいと思う。 また情報量を増やすのであれば、このシステムの方を使いたい、今のこのくらいの情報量ならば、紙でも支障はなさそう。 画像があることでイメージしやすくなる点が良いが、今の量の画像なら、紙でも補えると思った。 ・休み時間がなく、着替えにはいったので、一緒に入るべきが悩んだ。 ・準備のとき、係りの仕事はないのか不安だった。(他の人はしているのに…) ・あったらよかったと思う画像は、特になし。文字だけでも十分伝わった。 ・特に困ったことはなかった。 ・最初は一通り全部見たが、そのときに 頭の中にインプットしたものは、関係ある項目だけだった。(プロフィールの部分、トイレ、給食、休み時間) それ以外は、流し読みしただけで記憶には残っていない。
S ₂	<ul style="list-style-type: none"> ・最低限の情報を持って接する事が出来たので、最低限の対応はできたと思う。 ・本当に最低限の対応しかできなかつたので、きつともっと出来るのだろうと思う。 ・準備のときなどに、みやびさんが教室からいなくなったとき、どうしたらいいか分からなかった。 ・全体を通して、緑さんの意思を読み取れなかった。そのために対応が分からなかった。 ・昼休みに、特定の先生との追いかけてこが好きな事が分かったので、どう関わったらよいか分からずに困った。 ・コミュニケーションをどうやってとつたらいいか分からなかった。 ・昼休み、一人あそびになったり、他の先生にしか要求が出なかつたので、どう関わったらよいか分からずに困った。 ・はじめ(給食の準備中)、後ろに立っていたのが嫌だったのかもしれない。 ・トイレの支援をする前は、よく分かるようだと思っていたが、いざやってみると分からなかった。 ・給食の時「三角食べ」について、指示されて困った。 気づいていたが、しなくてもよい(必要ない)と思ったので、直後に1回声かけただけでそれ以外は意図的にしな ・ひるやすみに「おかしやさん」についての情報がなかつたので分からず、少し混乱した。 ・困る前に、先生のほうから直接指示があつたので、すごく困ったことはなかつた。 ・あまりに危険なことをしていたら止められると思って、先生にあまり聞けなかつた。 ・e-ppに書かれている内容は覚えていたから、途中、携帯電話を見なかつた。
S ₃	<ul style="list-style-type: none"> ・初対面の場合、積極的に支援するということはないと思う。方法も知らないし、自信もないから。 ・給食の時の促しの仕方について、声かけと動作で示すと有効のように感じた。 ・具体的な情報がなかつたからといって、困ったわけではない。 ・最初に見る時間があることは、有効的だったと思う。どこにどんな情報があるかをしておけるから。 ・最初に一通り全部見て、後は必要に応じて、活動中の次の活動の項目を見るようにした。

S ₄	・井上さんは、比較的ほぼ自立しているので、少しの声かけで出来たと思う。
	・関わる上で困ったことはなかった。
	・比較的補助がいらなかったのが、支援するほうとしてもよかった。
	・声かけのタイミングが難しく、次の活動・動作にいくことが難しかった。
	・瞬時に行動に移せなかった。
	・何度も使っていく上で、e-ppのよさがさらに出てくるように感じた。
	・普段と違う環境にすぐ適応できないので、もっと時間があればe-ppを使う回数も増えて、どこで見たらよいかわかってくると思う。
	・e-ppがどのようなものか少し分かったので、リラックスして取り組む事が出来た。
	・e-ppがあることで、落ち着いて子どもさんの情報を見られた。
	・e-ppがあることで、安心できたのでよかった。
	・基本的なこと(給食の場面で、茶碗を持って食べるということ)に気づいていなかった。
	・歌が好きで踊ったり、歌ったりと一緒に関わって楽しかった。関わった感じがある。
	・スローペースなので、どういう風に声かけすればいいのか困った。自分でできるのか？とまっているのか？
	・ほとんど自立していたので、声かけで出来たと思う。特に困ったことはない。
	・食事のとき、「手で食べる」「茶碗を持つ」と言ったことを先生から指示されたことに対して、「基本的なマナー」について、忘れていた。情報の内容(食べにくいものはスプーンを渡す)だけに、自分の注意がいていたからだと思う。
	・VOCAをいろいろな場面で使っていたが、うまく促したりする支援が出来なかったと思う。

(資料13) その他の感想(紙を利用した被験者)

S ₅	<ul style="list-style-type: none"> ・給食を食べなくなったとき、どうしたらいいかわからない。 ・つばをはくこと。物につばをつけているのは、止め方が分からずに困った。 ・もしパニックを起こしていたら・・・、コミュニケーションは・・・など、どう対応したらいいか分からなかった。 ・何でも口に持っていくこと。どうやるとめたらよいか分からなかった。そういう癖があるなら、初めから情報に入っているとよかったと思う。 ・事前に紙にて情報を得ていたが、実際に関わってみると、紙にない情報の出来事に直面する。そうすると、動揺した。 例)岩田君が一つのもの(パン)以外食べなかったこと。 ・子どもの意図がわかると支援者も接しやすい。 ・支援者が言っていることが分かるので、とても動きやすかった。 ・給食で嫌いなものがあったも、最後まで食べようとする姿勢に心打たれた。 ・支援のやり方、タイミングが違うだけで、先生がするようにはできなかった。 例)「おわんを差し出すと食べられる。」という方法にしても、先生がすると食べるのに、支援者がすると手でさえぎられる。またb君が別のものを見ているときに差し出してしまう。 ・先生と支援者と比べると、経験による差が支援に大きく出ている。このような経験からの情報は紙に示しにくい情報であると感じた。 例)岩田君に減らしてとお願いするソーセージを勧めるとき、「最後にひとつだけ」といって先生はすすめた。 ・経験から身につく感覚やVOCAを利用する子どもに対して、臨機応変に対応することが重要だと感じた。子どもに関わるボランティアの人などのなかで臨機応変にしようという気持ちがないと、アクシデントに対してすばやく行動できなくなってしまう。時に危険を招くかもしれないので、支援者の感覚で勝手にルール(偏見?)を作ってはいけないと思った。 ・VOCAというものは知っていても実際に使っている場面を見るのは初めてだったので、緊張した。 ・アンケートの7段階評価は多すぎると思った。選びにくい。
S ₆	<ul style="list-style-type: none"> ・給食のとき、「うーうー」といっていた理由が、自分のジュースにあったとは気付かなかった。 ・最初にどうしていいかわからなかった。 ・最初、どの子どもか分からずに戸惑った。 ・歯磨きのときに「いやだ」と拒否されたので、その後どう接したらいいか分からなかった。 ・ブランコで遊んだとき押していたけれど、いつまで押し続けるのか分からなくて困った。結局ずっと押し続けていたが... ・自分の持ってきているお茶がなくなってもまだ欲しいと言われたとき、どうしたらいいか困った。 ・歯磨きのとき、「お願いします」と言われたが、歯磨きを岩田君が手に持ったままでどうしたらいいか分からなかった。 ・お箸でつまんで食べるように支援するとき、口頭で言っても見本を見せても伝わらなかったこと。 ・支援は大変だった。 ・パンの食べ方やエプロンの洗濯などの、情報がなかったことについて、そういうこともあるだろうと思って、情報が足りないとは思わなかった。なくても、子ども本人が自分で出来ることだったり、先生に聞いたらすぐに出来ることだったから。 ・ボールの投げあいをして遊んでいるとき、楽しそうでよかった。 ・ほとんど支援が必要なかったのも、また4回目で少し慣れたのもあって特に困ったことはなかった。 ・給食食べるのに時間がかかっていたので、自分のせいかと思って不安になったが、困ったというわけではない。 ・子どもが一人でするところと支援が必要なおとところ、どのくらい接すればいいのかわからなかった。 ・支援中、先生にいろいろと指摘されて、迷惑をかけてしまったかもしれない。 ・先生に「今日は遅いよ」と言われているのを聞いて、支援者が関わっていたために遅くなってしまったのかと心配になった。
	<ul style="list-style-type: none"> ・給食の時、あまり支援が必要ではなさそうだったので、自分のすべきことが分からず、困った。 ・昼休み、一緒に遊んだほうがいいのか、一人で遊ぶのを見ているだけでいいのか分からなかった。 ・昼休み、関わり方が分からず、結局一人であそんでいたのも、どうしたらよいか分からず困った。 ・食器を持つての食べ方が分からなかった。 ・食事中、直接手で食べてしまう場面があったが、実際にどう支援したらいいかわからなかった。 ・昼休みに、一緒に遊ぶにはどうしたらよいか分からず、困った。

S ₇	・何をしたいのか、全然分からなかった。
	・食事の場面で何度も「ごま塩」を要求されて困った。
	・食事は自分でできと思っていたが、何度も促して少しずつ食べていく状態だった。途中無理に食べさせているのではいかと不安になった。
	・遊びの場面では、どのように遊ばばいいのか、何が楽しいのか分からなかった。
	・上着を脱ごうとしたときや、靴を履き替えずに出て行ってしまったとき、学校の中でいいことなのか悪いことなのか判断できずに困った。
	・遊びのとき、何をしたら楽しいのかよく分からなくて、追いかけるばかりになってしまった
	・食事でも食べることを促すだけになってしまった。
	・子どもが走り回れるように追いかけるようにしたが、先生のように遊びを作り上げるのは、なかなかできない。
	・食事の場面では、あまり支援することはなかった。食べる順番などは何か考えたほうがいいかもしれない。
	・危険な場面は特になかった。 ↑食器を返しに行くとき、外に出て行ったが…と質問すると、特に危険だとは感じない。
	・休み時間、土遊びをしていたがあれはどう思うか…という質問に対して、特に注意すべきことではないと思ったので、そのまま見ていた。
	・今日はよく見てましたねという話に対して…紙は、困ったときにすぐ見えるのでよかった。
	・昼休みに、他の人のVOCAを押すように促したことにに対して、他の人がそれを使って伝えているのを見て、沖さんも使ってもいいと思った。
	・先生が支援の見本を見せてくれると、安心してその後支援につけた。
S ₈	・スローペースなので、次にすることを子ども自身がわかっているのか判断できなくて困った。
	・遊びの誘い方がどの程度やっていいものか分からなかった。
	・「本当は自転車に乗りたい」と言う気持ちを先生のように気付くことができなかった。
	・子どもの役割分担や給食時の手順などが分からなかった。
	・次にどうい声かけが必要なのか戸惑うことがあった。
	・トイレには一緒に入ってもいいのか、戸惑った。
	・トイレトーパーを取るとき助けができなかったので、心配。
	・歯磨きのとき歯ブラシを噛んでしまって、なかなか先に進まなくて困った。
	・何をして遊ぶか悩んだ。
	・沖さんにも、「お箸は？」と聞くことができた。(沖さんが机に用意するのを忘れていたため)
	・今日は危険な場所というのは特になかった。おきなかった。
	・VOCAの使い方がわからなくて、一瞬混乱した。
	・支援の情報を忘れてしまっていることがあったので、もっと覚えておければうまくできたと思う。
	・分からないときはすぐに先生に質問すればよかった。

当事者情報の電子化に対する 養護学校教師の態度に関する調査

坂井聡*1

1 目的

障害が重度になればなるほど、適切なコミュニケーション方法を選択し、その人の意思をスムーズに引き出すためには、多くの時間を割かなくてはならない。しかし、このようにして、多くの時間を割いて確立された、重度の障害のある人との間のコミュニケーションが、職員の配置の異動などで、一からやり直すことになってしまうことがあったり、親子の間で確立されているコミュニケーションが、他の人との間ではうまく使えなかったりする現実がある。重度の障害のある人の円滑なコミュニケーション環境を維持していくためには、支援者がもっている情報を周囲の人と共有できなければならない。支援者が代わっても重度の障害のあるその人の情報を引き継ぐことができれば、今ある環境を維持することが可能になり、それは、重度の障害のある人の生活の質を高めることにつながると考えられるからである。

情報を共有するための方法として、施設では個人記録、養護学校では個別の指導記録など、今までは紙をベースにしたものが使われてきている。しかし、紙の場合は次に示すような限界がある。

・紙の場合は、紛失したり、机の上におかれたままになっていたりすると、プライバ

シーがもれてしまう。

・紙に書かれた文章の場合、支援者によって、その情報の受け取り方が様々になってしまっており、適切な支援につながらない場合がある。

・文章では表現できない、分かりにくい情報も多い。

近年の IT (情報技術) の飛躍的な発達は、音声等を利用して説明しにくいような情報も容易に補うことを可能にしてきた。言葉ではうまく説明することができない場合には、映像を使って伝えたり、インターネットに接続して情報を提供したりするといったことが、簡単にできるようになってきている。画像を用いた情報伝達手段として巖淵・中邑・Alm・Burgstahler (2004) は、携帯電話を利用したコミュニケーション支援システム (electronic personal profiler: 以下、e-pp システムと呼ぶ) を開発している。しかし、こういった IT 機器の福祉や教育現場への導入には得体の無い不安を感じる人が多いのも事実である。そこで、ここでは、e-PP を運用するに考えていかなければならない個人情報の問題など、利用する側が持つ不安等を明らかにした。

2 方法

研究協力者：知的障害養護学校の教員 6 名 (男性 3 名、女性 3 名)。年齢は 30 代から 40 代であり、いずれの教員も携帯電話を

*1：香川大学教育学部附属養護学校

利用していた。日頃から携帯電話でインターネットにアクセスして情報を得ている人は1名であり、パソコンを使ってインターネットから情報を得ている人は6名であった。障害のある子どもの指導経験は、5年未満が1名、5～10年未満が1名、10年以上が4名であった。

手続き：研究協力者に対し、e-PPを用いた障害当事者の個人情報の電子化と支援方法に関する講習会を実施し、教師のe-PPに対する態度を調査紙及びインタビューにより聞き取った。約3時間の講習会では、e-PPを用いた生徒のプロフィールの作成方法と閲覧方法が説明された。講習会終了後、聞き取りが行なわれた。調査紙の項目はTable 1に示した。

Table 1 講習会後の聞き取り項目

- (1)性別
- (2)年齢
- (3)障害のある人への指導経験年数
- (4)今後のe-PPシステムについての継続利用についてどう思うか
- (5)引き続いて使いたいと思う理由
- (6)どのような項目が入っていたらよいと思うか
- (7)e-PPが役立つと思われる場面
- (8)e-PP利用する場合の困難・問題点
- (9)e-PPの改善点
- (10)プライバシーの保護を考えると、どのような情報が保護されるべきなのか

3 結果

6人の回答は資料1のとおりである。質問項目(5)～(9)間での項目については、内容ごとに関連するものを集めてグループにし

た。グループを作る際には、養護学校で10年以上の指導経験のある教師、障害のある人へのボランティアの経験のある社会人、障害のある人には接したことない学生の協力を得て、各意見をカードにし、類似した項目ごとにまとまりを作るという方法で整理した。

(5)～(9)までの項目の整理結果については、以下のFigure 1からFigure 4の示すとおりである。

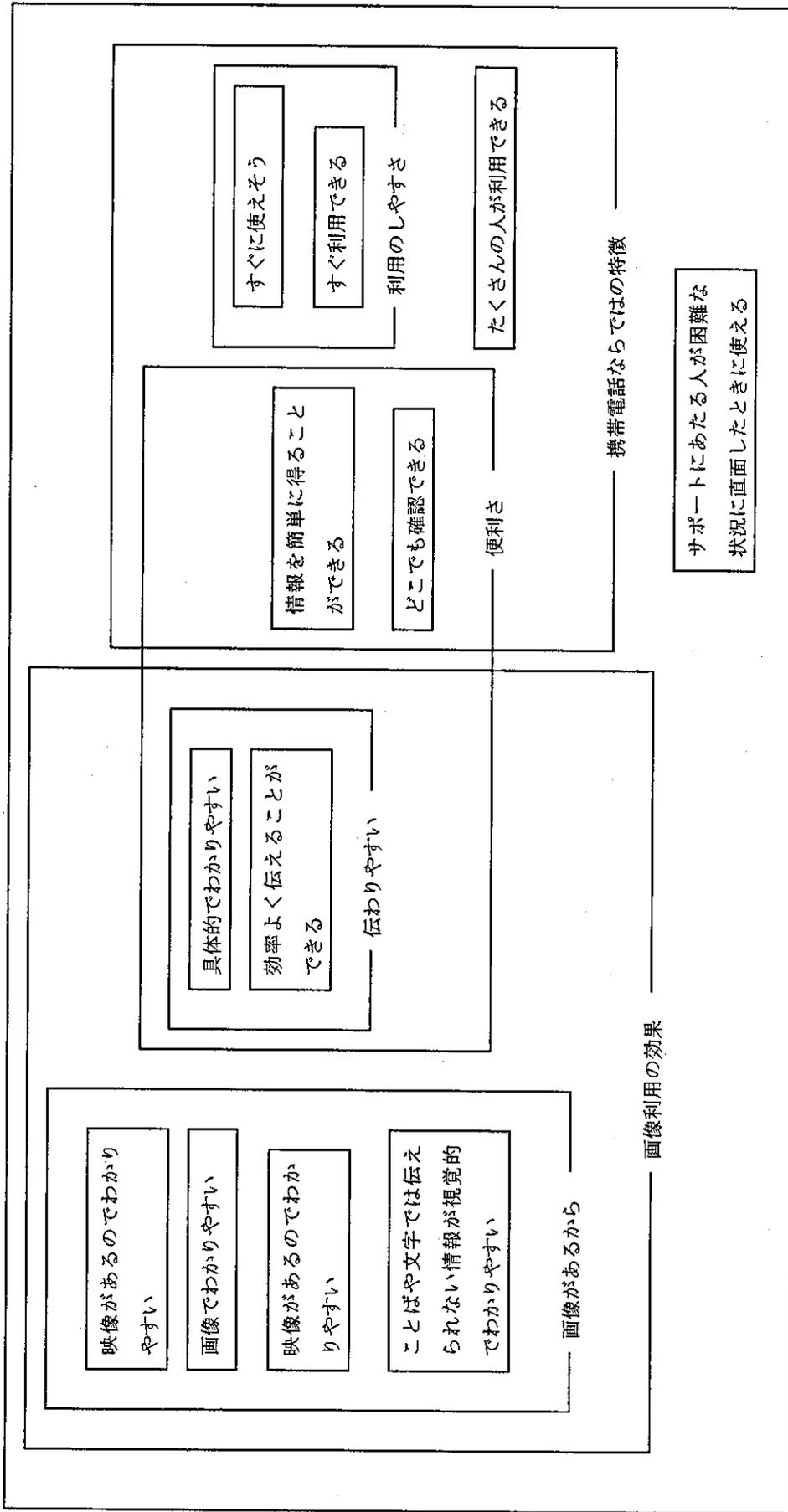


Figure 1 項目(5)「(4)の回答を選んだ理由」の内容

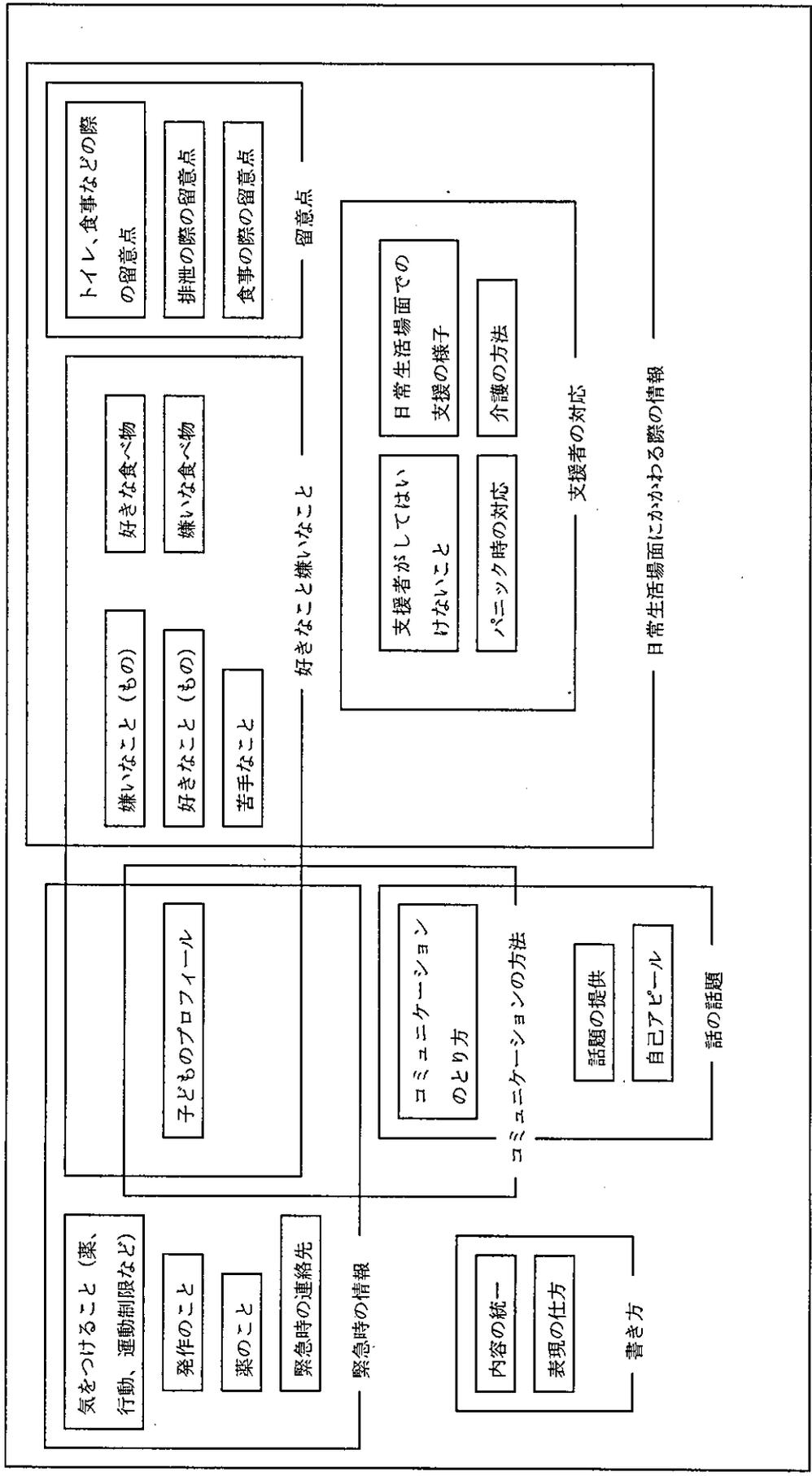


Figure 2 項目(6)「どのような項目が入っていたらよいと思うか」の内容

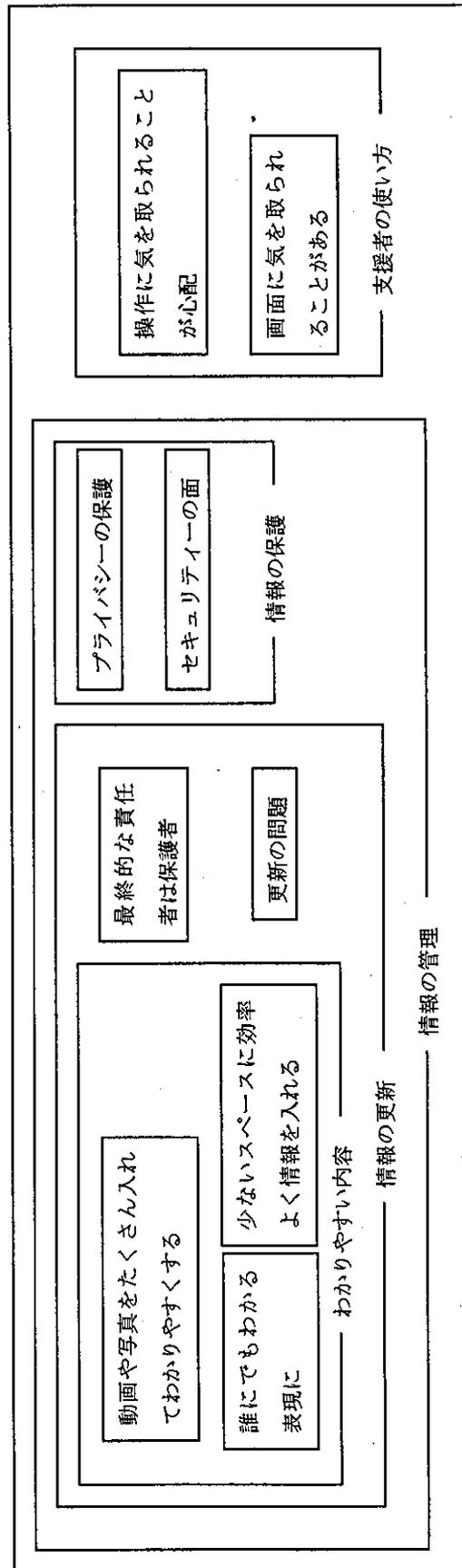


Figure 3 項目(8)「e-PP 利用する場合の困難・問題点」の内容

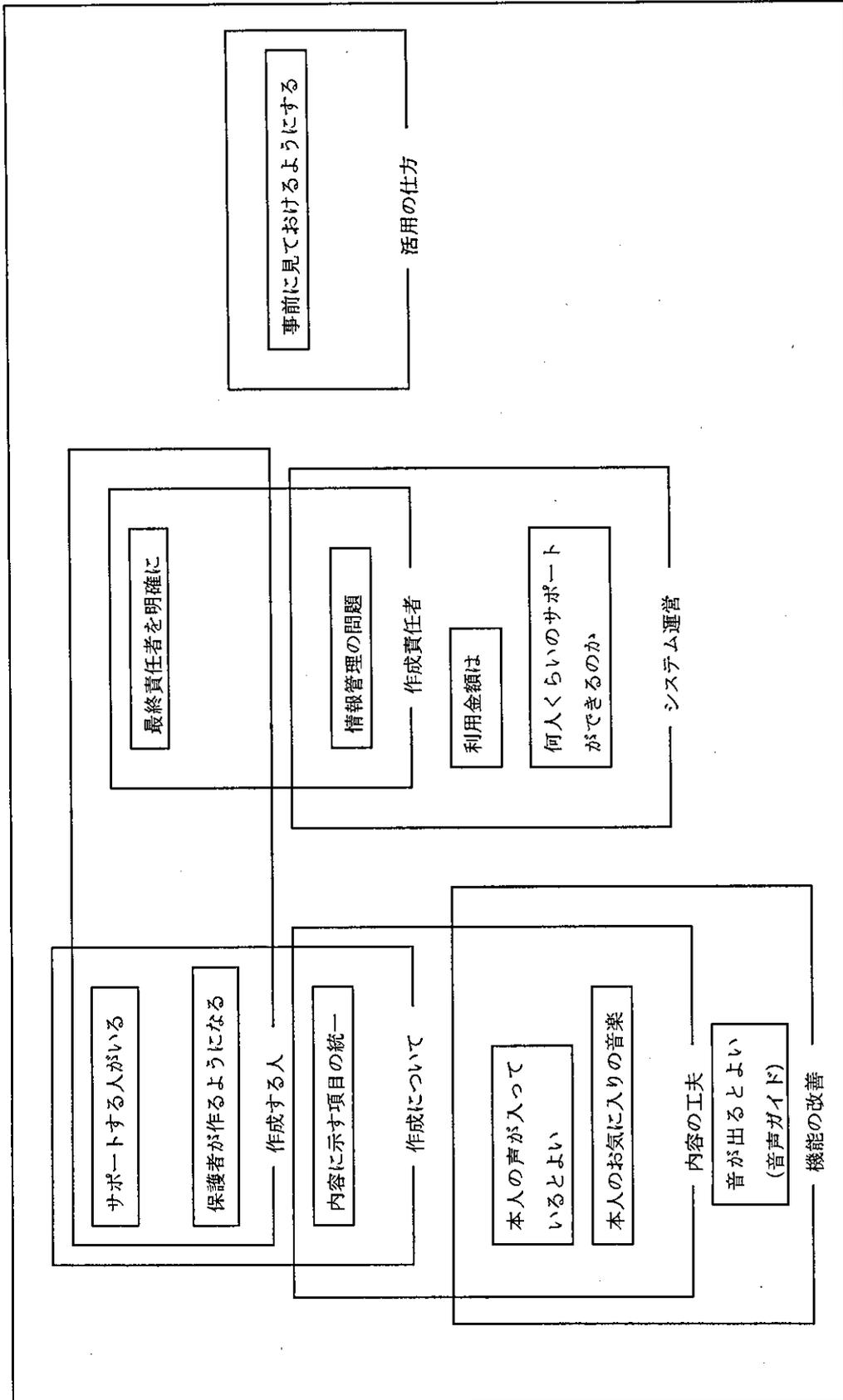


Figure 4 項目(9)「e-PPの改善点」の内容

項目(4)については、いずれの回答者もとも興味があるという回答をしている。

項目(5)の回答は大きく分けて二つに分けられる。一つは画像利用の効果であり、一つは携帯電話利用の特徴についてである (Figure 1)。

項目(6)は日常生活にかかわる情報とその他に分けられる。日常生活における情報は支援の際の留意点と、実際に日頃支援している人の支援方法に関する事、利用者のプロフィールの中でも好き嫌いに関する内容である。その他に関しては、コミュニケーションに関する事、緊急時の対応、書式などに関する事である (Figure 2)。

項目(7)は新しく利用者に接する人に対して有効であるという回答に集約できる。

項目(8)は情報の管理と支援者の使い方に分けられ、情報管理については、その内容や情報の更新、情報の保護に関する事に分けられる (Figure 3)。

項目(9)については、活用の仕方、システムの運営、作成内容、機能の改善といった内容に大別することができる (Figure 4)。

4 考察

Figure 1 からは、携帯電話利用が十分に可能であることが読み取れる。利用しやすい、便利さというカテゴリーからは、携帯電話が現在でも十分に活用されており、その便利さを実感していることが伺える。また、利用者の情報をわかりやすく伝えられるということも便利さにつながっていると思われる。

また、わかりやすく伝えるということでは、画像を使うことによる効果が大きいということも回答からうかがい知ることが出来る。「ことばや文字では伝えられない情報

が視覚的でわかりやすい」という回答には、画像による情報が文字やことばより有効であるということを実感していることの表れであると考えられる。

このようなことから、e-PP 活用のためには、画像を処理することができるタイプの携帯電話がもっとも有効であり、その場合、液晶の画面も大きいことが望ましいということがいえるのではないかと思われる。

Figure 2 に示されているように、「利用者が日頃どのような介護を受けているのか」という支援の方法についての情報が必要であるということは、予想されるものであった。食事やトイレ、パニック時の対応などは、支援する際にはどうしても知っておきたい情報であると思われるからである。また、同時に緊急時の対応についての情報も知っておきたい情報の一つとしてあげられている。これらの情報を得ることで支援する側は安心を得ることができると考えられるからである。

入っていればよいという情報の中に、「好きなこと」、「嫌いなこと」「コミュニケーションの方法」などの項目が入っていた。これらの情報は、利用者がより質の高い支援を受けるうえで大切な情報であると考えられる。これらの項目が回答の入っているのは、より質の高い支援をしていきたいという回答者の気持ちが反映されたものであると考えられる。また、コミュニケーションに関する項目として整理されたものの中に、話題の提供と自己アピールの項目が入っているが、これらの項目が入っていることは、e-PP が支援する人のためのものではなく、利用者などの支援を受ける側のものであるということが意識されていることであると考えられる。

これらの回答には、アンケートの回答者

がすべて教員であるということが反映されていると思われる。教員の場合、自分自身が支援者、指導者になる場合もあれば、学校等にかかわってくるボランティアや介護等体験の学生に、適切に子どもにかかわってもらいたいという気持ちもある。支援する側の立場に立つこともあれば、利用者側の立場に立つこともあるということである。この二つの立場のうち後者の立場で e-PP を考えると、質の高い支援を相手に要求するための項目が入ってくるのは当然だと考えられるからである。

内容の統一や表現の仕方ということについての回答からは、e-PP を作成する際、効率よく作成するために、これらが統一されていけば書きやすいということがあげられる。あらかじめ内容が統一されていた場合と、自由記述の場合では、作成のために要する労力が違うということであろう。表現の仕方についてであるが、表現の仕方が変わることで、利用者のためのものか、支援者のためのものかということが変わってしまう。e-PP は利用者のためのものであり、それを意識した表現の仕方をするべきだと考えるが、このことについて理解していることがこのような回答につながっているものと考えられる。余談であるが、e-PP の内容を子どもの言葉で表現したものを聞いたときの感想として、保護者から「子どもの言葉で書いていることがうれしかった」というものがあり、非常に好評であった。e-PP の内容の表現を考えるうえでも参考になるものと思われる。

項目(8)には、今後の e-PP を考えていくうえでの重要な課題が表れている。それは、映像を入れてわかりやすくすることと利用者のプライバシーの問題、情報管理の責任と情報の保護の問題等が回答にあら

われているからである。e-PP では、障害のある人のための情報を共有することで、より質の高い支援を実現していきたいという基本的な考え方がある。しかし、Figure 3 に示されている回答からは、情報をインターネット上で共有することを考えた場合、情報の保護に対して不安を感じている人が多いということである。インターネットを使うということ、ホームページ上の情報が不特定多数の人に漏れてしまう可能性があり、それについての不安が表れているということである。その反面、項目(10)では、「どのような情報が漏れたら困るのか」ということについての回答では、それについては具体的はわからないという答えが最も多く、次いで多かったのは、住所、電話番号などの情報が漏れることが怖いという回答であった。しかし、項目(6)の質問に対し、緊急時の内容は必要であるという答えがある。この相いれないものを解決していかなければ、e-PP が広まっていくことはないと考えられる。

これら回答から考えられることは、具体的にどのような情報が漏れることが怖いということはよくわからないが、「インターネットを使うこと＝情報が漏れること」という根拠のない怖さが先行していることに原因があるように思われる。最近のインターネットを介した情報の漏洩の問題が、不安を掻き立てることになっているのではないであろうか。これは、サポートブックなどの紙を利用したサポート情報の提供の場合、同じような内容が記載されていたとしても、情報が漏れることについては、これまであまり言及されてきたことがないのに対し、e-PP の場合には不安に感じることがあるというところからもうかがい知ることができる。しかし、紙に書かれた情報が安

全なのか、電子化された情報が安全なのかを考えると、パスワードの管理やアクセスの制限を厳しくおこなえば、電子化された情報の方がその管理は安全におこなえと考えられる。インターネットに対する誤解もこれら回答の中に読み取ることができると考えられる。

サポートブックの場合は、それを渡した相手が見えるので、責任が明確になり安心できるということなのかもしれない。それに対し、e-PPは、インターネットを利用するので不特定多数の人がこちらが知らないうちに閲覧してしまうという可能性があるということで、責任の所在がはっきりしないことや、相手の顔が見えないことが大きな原因のように思われる。利用者が安心して使うことができるようにしていくためには、どこまでのセキュリティーの確保が必要でかつ可能であり、どこまでの情報記載が効果的で有効なのか、どのような形であれば安心してe-PPを使うことができるのかといったことについて、今後議論していく必要があるであろう。

上記のことを議論していくうえで参考になる回答がFigure 4に整理された回答の中に示されている。項目(9)の回答の中には、記載の責任者が誰なのかという回答がある。記載の責任者が利用者自身であるか、保護者になった場合、掲載内容を検討する際に万が一情報が漏れた場合のことも考えてその内容を考えていくことで解決することができるのではないかと考えられるからである。当然、セキュリティーについては万全を期するようにしていかなければならないが、100%安全であるということにはありえない。万が一のことも考えて、そこに掲載する内容を利用者や保護者が決めて情報を作っていく方法がよいのではないかとこのこ

とである。このように、万が一も考えた対応が検討されるべきであろう。幸いにも2005年4月1日より個人情報保護法案が施行される。この法案とe-PPについても今後議論していかなければならないものと考えている。

ところで、項目(9)の回答の中には、サポートする人の存在が必要だとする答えがある。個人の情報を作成し、掲載していく際にこのシステムに精通した人の存在が必要であるということである。パソコンや携帯電話でインターネットに接続する機会が多く、抵抗なく使うことができる場合はよいのであるが、実際には、ホームページに掲載するための作業について、うまくできないと抵抗をもっている人もいるということであると思う。また、システムにどのくらいの人数の情報を載せることができるのかといったことや発生する利用金額等についての課題も残る。これらは、実際にシステムが構築されて管理運営が責任あるところでおこなわれるようになったとき、つまり、研究の域から出たときに考えていかなければならない問題であろうと思われる。

以上のようにアンケートの結果から見えてきたものを考察してきた。このアンケートは対象が教員であり、ヘルパーや施設の支援員、保護者などの意見は反映されていない。実際に使っていきながら、いろいろな立場の人からの意見を吸い上げていく必要があると思う。より質の高い支援を実現するための一翼をe-PPのシステムが担うことができるように、そのシステムを充実、熟成させていかなければならないと考えている。

(資料 1) 研究協力者の回答

●回答者 1

- (1)男性 (2)40代 (3)10年より長い (4)とても興味がある
- (5)サポートにあたる人が困難な状況に直面したときに使える
- (6)内容の統一、表現の仕方、支援者がしてはいけないこと
- (7)
- (8)動画や写真をたくさん入れてわかりやすくする
- (9)音が出るとよい(音声ガイド)、本人の声が入っているとよい、本人のお気に入りの音楽
- (10)わからない

●回答者 2

- (1)男性 (2)40代 (3)10年より長い (4)とても興味がある (5)すぐに使えそう
- (6)コミュニケーションのとり方、介護の方法、緊急時の連絡先、話題の提供、自己アピール
- (7)新しいボランティアと会うとき、新しい環境に入っていくとき、名刺代わり
- (8)少ないスペースに効率よく情報を入れる、更新の問題
- (9)保護者が作るようになる、サポートする人がいる、利用金額は、何人くらいのサポートができるのか
- (10)使ってみないとわからない

●回答者 3

- (1)女性 (2)40代 (3)10年より長い (4)とても興味がある
- (5)映像があるのでわかりやすい、すぐ利用できる (6)わからない
- (7)普段よく接していない人に伝えるとき
- (8)プライバシーの保護
- (9)
- (10)住所、電話番号

●回答者 4

- (1)女性 (2)30代 (3)5年以下 (4)とても興味がある
- (5)効率よく伝えることができる、画像でわかりやすい
- (6)コミュニケーションのとり方、食事の際の留意点、排泄の際の留意点、発作のこと、薬のこと、好きなこと(もの)、嫌いなこと(もの)、パニック時の対応
- (7)支援する人が上記のような場面に接したとき
- (8)最終的な責任者は保護者、セキュリティーの面、誰にでもわかる表現に、操作に気を取られることが心配
- (9)情報管理の問題、事前に見ておけるようにする
- (10)氏名、住所、電話番号

●回答者 5

- (1)男性 (2)40代 (3)5年以下 (4)とても興味がある
- (5)ことばや文字では伝えられない情報が視覚的でわかりやすい、具体的でわかりやすい、
たくさんの人が利用できる
- (6)子どものプロフィール、好きなこと、嫌いなこと、好きな食べ物、嫌いな食べ物、トイレ、食事
などの際の留意点
- (7)
- (8)プライバシーの保護、画面に気を取られることがある
- (9)最終責任者を明確にする、内容に示す項目の統一
- (10)わからない

●回答者 6

- (1)女性 (2)30代 (3)5年以上 10年以下 (4)とても興味がある
- (5)映像があるのでわかりやすい、どこでも確認できる、情報を簡単に得ることができる
- (6)子どものプロフィール、好きなこと、苦手なこと、日常生活場面での支援の様子、気をつけるこ
と(薬、行動、運動制限など)、パニック時の対応
- (7)介護等体験の学生、子どもにかかわるボランティア、初めて子どもにかかわる人
- (8)使ってみないとわからない
- (9)
- (10)わからない

<報告 1 2>

米国における重度障害者向け コミュニケーションエイド利用に関する動向

巖淵守*1, 中邑賢龍*2

1 エビデンスをベースとした 評価

コミュニケーションエイドなどの支援技術(AT: Assistive Technology)は、障害のある人や高齢者の能動的生活を支援する上で大きな役割を果たし、近年、その利用も増えつつある。それらAT製品は、できなかったことが可能となることで、その影響力が高く評価されてきたものの、これまでその評価は主観的なものにすぎなかった。障害を持って誰かがATを利用して生活できる社会を構築するには、AT利用が何に対してどの程度の効果があるかについて、客観的・量的なエビデンス(証拠)を示すことが求められる。米国では、近年、ATに関するエビデンスをベースとした実践(EBP: Evidence-Based Practice)に大きな関心が寄せられ、その教育にも力が注がれている。本報告書では、AT製品の1つとしてコミュニケーションエイドに関する話題に焦点を当て、機種を選定や導入、ならびに利用に対する訓練にEBPがどのように関わっているかについて、米国の現状を紹介する。

*1: 広島大学大学院教育学研究科

*2: 香川大学教育学部

2 EBPの背景

EBPは、医学分野で行われてきたエビデンスをベースとした医療

(EBM: Evidence-Based Medicine)がその基となっている。「EBMとは、研究による最良のエビデンスと臨床における専門技術、ならびに患者にとっての価値を総合したもの」と定義され、考え方そのものは、19世紀の半ばのパリにおいてやそれ以前の医療ですで見られる(Sackett他, 2000)。1990年代のはじめにEBMを定義した文献が登場し、それ以後急速に広まった。しかし、言語聴覚士(ST: Speech Therapist, 米国ではSLP: Speech-Language Pathologistが一般的)をはじめとする専門家は、コミュニケーションエイドに関わる分野にて、臨床はもとより、研究の場においても、これまでエビデンスをベースとした実践をほとんど行ってこなかった。

エビデンスをベースとしない場合、関連する医療分野における権威ある専門家からの意見に判断が左右されやすことが指摘されている。特に経験の浅い医師ではこの傾向が強く、専門家からの意見が、根拠のない主観的な意見であるのか、証拠に基づいた判断なのかの区別ができない。一方、患者の側に立てば、受ける治療や処方され